

ある炭坑夫の半生

山上, 道記
元北波多炭礦

<https://doi.org/10.15017/10149>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 23, pp.45-64, 2008-03-28. 九州大学附属図書館付
設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【回想】ある炭坑夫の半生



江上鉱業㈱北波多炭礦時代
1961年31歳
左手の下はガス測定器

山 上 道 記

目 次

- 深町純亮著『炭坑節物語』の序にかえてより抜粋
- §1 はじめに、私の考え方の基本
- §2 私の生いたち
- §3 測量という仕事
- §4 なぜ大手炭礦を辞めたのか

- §5 北波多炭礦時代（住友系）乙種炭坑
 - §6 新昭嘉炭礦時代（住友系）乙種炭坑
 - §7 再び北波多炭礦へ
 - §8 北海道時代の炭礦の暮らしの思い出
 - §9 北海道生まれの私がなぜ筑豊にいたのか
 - §10 私の突発性難聴と妻弘美の死
 - §11 ゼネコン（総合建設業）退職後の私
- むすび

深町純亮著『炭坑節物語』の序にかえてより抜粋

九州大学名誉教授 秀村 選三

私は農村史が専門で石炭の専門家ではありません、私の父の郷里は筑豊の穂波町で、また父が国内や中国の山東省で長く炭坑をやったこともあり、筑豊や石炭とは深い縁があります。

19世紀のいわゆる「蒸気船時代」、ちょうどその時期にわが国はまっ

たく資源が乏しいにもかかわらず、石炭を持つていたということは実に大きな意味がありました。日本が急速に工業化・近代化をなし、遅れはせながら欧米に追いつくことができたのも、まさに石炭があつたからなのです。今日では日本の工業化・近代化はしごく当然のことのように思われ、石炭が果たした役割をあまりにも小さく見ているようです。石炭が日本の工業化・近代化・産業革命に、さらには戦後の復興にどれほど大きな役割を果たしたか——これは学問の上でも、市民の意識としても、しっかりと位置づける必要があります。

石炭はたいへん巨大なものです。技術・労働・政治・法制・産業経済等々種々な面がかかわるわけですが、同時に社会風俗・演劇・遊郭・文学等にかかわる面も多くあります。

みんなでこれらの資料を集め、物を保存しなければなりません。同時に石炭にかかわってきた人たちから石炭のこと、炭坑のことを聞くには今の時代を逸してはなりません。一人一人の体験ほど具体的に確実なものはなく、これを後世にしっかりと伝えてゆかねばならないからです。今や石炭を忘れようとしている時代なればこそ、石炭を研究する若者を育てなければというのは私の悲願です。

石炭というのは案外ウエットなもので、或る年齢以上の九州の人間は大なり小なり石炭にかかわりをもち、何かの機会に石炭の話題に火がつくと、熱っぽく話しあうことは屢々あることです。これまで、私は何度か、「自分は石炭の研究には向かない。地の底のことは分からない。石炭の研究から足を洗う」と宣言してきましたが、やはり時には血に騒ぐものがあり、最近も明治初期の石炭経営についての小論をまとめました。所詮石炭との縁は断ち切れず、これからも何らかの形でかかわ

りを持つてゆきたいと思っております。

九州内陸のすべてのヤマの灯が消えてしまいました。まことに痛恨やるかたなきを覚えます。政府も目先のことで以外何もしないようです。歴史に学ぶものはないのでしょうか。さもあらばあれ、今こそ関係者一同連帯し協力し合つて、石炭の意義を正しく位置づけるべきです。

故きを温ねて新しきを知ると申します。石炭産業の盛衰をかえりみることに、近現代日本社会の本質を、そして日本の将来を、さらにはエネルギー問題の今後を知ることができるのではないのでしょうか。

§1 はじめに、私の考え方の基本

深町純亮氏著「炭坑節物語」の「序にかえて」で、秀村選三九州大学名誉教授が書かれているように「日本に石炭があつたからこそ現在の日本があるのだ」ということと、「石炭が果たした役割」をしっかりと自覚していただきたいと思っております。このことはほとんど忘れられていきつつあります。さらに、夕刊読売新聞二〇〇二（平成一四）年四月二三日付の「NY響け筑豊の魂」の記事で「石炭を掘り出した筑豊があつたからこそ日本は栄えた」で筑豊にこだわっています。西日本新聞二〇〇三年一月二六日付の「東京発かわすじビープル」と題した記事で「筑豊の石炭の歴史は、たかが一〇〇年、その間に、大勢の人が来て去つて行っただけ、現在の筑豊は炭鉱時代の残像を追いかけているだけ」という一文を皆さんはどのように解釈されますか。私はショックを受けました。この一〇〇年間で炭礦で殉職「殉職者は推定二万人とも言われている（田川市石炭記念公園・田川地区炭坑殉職者慰霊之碑・碑文」

より」(された人々等を振り返ってみる時、私はあまりにも心ない発言だと思えます。

私自身は、炭礦時代に技術屋として一人前になるためには、専門書を讀む必要があると感じ専門書を集めました。そして国による、第一次石炭政策が一九六二(昭和三七)年一〇月に発表された頃には、一生大丈夫といわれていた大手炭礦を含めてなだれ閉山が続いていました。その時点で炭礦の将来はないものと判断しました。当時、私は石炭鉱業整備事業団九州支部「現新エネルギー産業技術開発機構(NEDO)」(以下事業団と称す)に対して、後述の江上鉱業(株)北波多炭礦の買上交付金の申請業務を致していました。業務を遂行するためには、いろいろな法律を勉強しなければなりません。申請業務を遅れないにするために寝る暇もないぐらい仕事をしました。この時にかんりの専門書と資料が集まり、この専門書と資料を持っていて、将来は炭礦の歴史を学ぼうと考えていました。六〇歳の頃、一人でやるには「テーマが重過ぎる」と考えるようになり、何処か専門に研究している所に専門書や資料を寄贈して役立てもらったらと思いい、飯塚市に九州大学石炭研究資料センターの支所があることを教えられましたので、そこへ寄贈しました。(現在は所在不明)センター長の東定教授からの私信で「残念ながら日本の石炭産業は現在瀕死の状況にあります。いつの日か再び陽の光を仰ぐことができるかどうかは別として、日本の今日あるのは石炭業と農業のお蔭であることをきちんと歴史の中に明かにするために、石炭に関する史料を保存し、研究をしなければならぬと思っております。これら史料を、後世に伝えるのは我々世代の義務だ。今、やらないと炭礦の歴史は消えてしまう」と教えられました。東定教授の教えを受けているうちに、史

料収集の大切さを自覚し情熱が湧いてきました。当時は、建設会社に勤めており、筑豊から離れていたため、新聞の筑豊版を読むこともなく、一九九五(平成七)年七月、筑豊に帰ってきてから新聞の炭礦関連の記事の切り抜きをはじめました。そして石炭資料館・石炭記念館・図書館・炭礦の歴史の研究者を廻り教えを受けながら、炭礦関連の史料の収集に努めました。そこで発見して欲しい本は発行所に取り合わせてみましたが、ほとんどが絶版で入手することはできませんでした。現在は古本屋を利用してありますが結構入手できます。

『糸田町史』(六四九頁)に、「糸田町は明治中期から炭田開発が進み、筑豊地方有数の炭鉱町として発展した町である」とあり、炭礦名は記してありますが、詳細は解りません。「当町は炭礦で栄えた町である」ということを知らない町民が増えてきました。炭礦経験者の高齢化が進み、人数も少なくなり(近い将来ゼロとなります)。「今、聞き取り調査をしなければ、糸田町の炭礦の歴史は、消えてしまう」という危機感がつき、数年前、広報「いとだ」を活用して「糸田町郷土研究会(仮称)」を立ち上げるべく会員の募集をしましたが、応募者がなく見事に失敗に終わりました。私としては、聞き取り調査をして「書いたもの」で残したかったのですが、耳が聞こえませんが、「聞き取り調査を一緒にする同志」が欲しかったのです。糸田町は炭礦より、放浪の俳人・種田山頭火の研究に熱心ですが、炭礦(山頭火の恩人の木村緑平氏が明治豊国炭鉱病院に医師として勤務していた)がなかったら、山頭火も糸田に来ることとはなかったと思います。

『嘉穂地方誌』（現嘉飯山郷土研究会誌）第二号「一九七三（昭和四八）年一二月発行」に「雑感」として「石炭資料展をみて」と題して次のような意見が発表されています。筆者はペンネームの熊三以外は不明です。私もまったく同感です。

（雑感）石炭資料展をみて

先日（一〇月一〇日、一四日）、県文化会館で、宮崎太郎氏によって収集された石炭資料が展示されたので見に行つた。資料は主として戦後のものが多く、労働組合側と並んで炭坑（主）側の資料もあり、そのひとつひとつに日本の資本主義を、その地下の根底から支えた苦闘の歴史の「コマをみる」ことができた。

資料を見終つて汽車で帰りながら、次のようなことを考えた。このような資料展は筑豊のなかを巡回して開く必要はないだろうか。都市化した福岡市の中心地のなかで展示することは、全く無意味と一概には云えないが、観覧者が少なく、しかも市内・その周辺に限られていることは、一つの答えの意味をもち、成功したとは言いがたい面を示してはいないだろうか。

そもそも、郷土に関する歴史的資料というものは、その地元においてこそ生きた資料となりうるし、地域の人々が自らの歴史をふりかえる貴重な場となりうるはずである。とりわけ、長年、その渦中のなかで収集された宮崎太郎氏の石炭資料が県立図書館に納められたという新聞記事を読んだとき、強くそのことが思われてならなかつた。と同時に、まるで石炭によって得た利潤が地元で還元されることなく、中央に持ち去られたように、その記録も地方のなかの中央・福岡市に持ち去られたように思われてならなかつた。筑豊の近現代

史が「搾取」の歴史であつたように、今度は、文化的「搾取」が県のお役人様の手によって、その石炭の記録はもちだされてしまつたようにも思えた。まだまだ筑豊における受難の歴史は続いている。

ただ残されたものは、日毎に丸くなりつつあるボタ山と、復旧のメドのつかない鉱害田、そして、残骸が放置された灰坑設備である。

最後に書きたいのは、これらの石炭資料の保存と公開は、地元の図書館等の関係機関がなすべき仕事ではなかつたのかということである。田川の山本作兵衛氏の炭坑画が田川市立図書館に収納されたように。しかし、悲しいかな、地元の図書館等にはその努力がなされていなし、それらを収集し整理するだけの能力が欠けているように思えてならない。少くとも立派な文化センターをもっている飯塚市は、市立図書館のなかに歴史的郷土資料を整理して行く、専門的な司書を置き、その仕事をなすべきではなかつたか。

今こそ、文化の不毛の地と言われている郷土に眼をむけて、何をなすべきかを考えるときではあるまいか。（熊三）

右に引用した「石炭資料展をみて」にある宮崎太郎氏とは、穂波町（現飯塚市）の住友忠隈炭礦住宅で生れ、忠隈炭礦に勤務したこともあり、戦前の労働運動家で、戦後、社会党、後に民社党の県会議員をつとめ、引退後、一九七八（昭和五三）年に「筑豊炭鉱遺跡研究会」を創設し、会長に就任。会報を発行（第一七号で廃刊）していましたが、一九八八（昭和六三）年に宮崎氏の没後（享年八一歳）、「筑豊炭鉱遺跡研究会」の活動は、停止したままです。

炭礦の閉山と日本の高度成長期が重なったので、炭礦施設やポタ山は解体され、工業団地や住宅団地に造成され、炭礦の面影はほとんど消え残った「住友忠隈炭礦ポタ山」は「筑豊富士」と呼ばれ、田川市石炭記念公園の立坑櫓・二本煙突も「近代化産業遺産」として最近ようやく脚光をあびてきました。その他、残されている炭礦遺産の保存運動にも、もつと力を入れるべきだと思います。

私が持っている史料は新聞の切り抜きがほとんどで皆さんも読まれたものが多いと思います。炭礦の歴史を研究されている方に、私の持っている史料で役立つものがあれば、次ぎの世代に引き渡していきたいと思っています。「炭鉱馬鹿」と言われることに人生の生きがいを感じていません。

これまではただ漠然と炭礦の史料を集めてきました、今後は皆さん方の力を借りながら、(三人寄れば、文珠の知恵)炭礦の歴史を系統立て学んでみようと思っています。

炭礦の歴史を学ぶには、各・市・町・村が発行している市・町・村史(誌)が一番てつとり早いのではないだろうか。

一期一会(茶道の言葉)と、そして、地道な継なかりを一層大切にしながら、形骸化することなく「継続は力なり」という言葉を大切にしていきたいと思っています。作家吉川英治氏に「我以外はみな師」という著書があります。

専門的になりますが、炭礦(坑口別)は、坑内の可燃性ガス含有率と、爆発性炭じんの発生量によって、甲種炭坑と乙種炭坑の二種類に分けられています。石炭鉱山保安規則では、次のように定められています。

第二節 石炭坑の種別

(種別指定)

第五条 石炭坑を甲種炭坑と乙種炭坑に分ける。

2 甲種炭坑は、左の各号の一に該当する石炭坑であつて、通商産

業(現経済産業)大臣が指定するものをいう。

一 排気坑道の気流中における可燃性ガス含有率が〇・二五パーセント以上であるもの

二 掘進坑道の気流中における可燃性ガス含有率が〇・五パーセント以上であるもの

三 通気施設の運転を一時停止したとき含有率が三パーセント以上の可燃性ガスが通行坑道または掘進作業場に見出されるもの

四 坑内において爆発性炭じんの発生が多いもの

3 乙種炭坑は、甲種炭坑以外の石炭坑をいう。

4 第二項第一号から第三号までの可燃性ガス含有率は、鉱務監督官(通産省の役人)可燃性ガス検定器またはガス分析によつて、当該箇所を空気を数回系統的に測定したものである。

5 略

6 第二項第四号の炭じんの発生量決定のための試料の採取および発生量の測定は、鉱務監督官が行つて。

その他、特免規則等は略します。

§2 私の生いたち

なぜ私は北海道で生れたのか。父が穂波町（現飯塚市）の住友忠隈炭礦に勤めていた時、住友の北海道歌志内村坂炭礦で八月五日に炭じん爆発があり、七〇名の殉職者を出したため、一九二九年秋に忠隈炭礦から大勢の人が移住（父三四歳、母二八歳）した際の一人で、母は当時妊娠七ヶ月（お腹の中にいたのが私）でした。この時一緒に行った仲間とは生涯親密な交わりが続きました。一九三〇年に歌志内村坂炭礦社宅で生れ、七八歳です。七人兄弟姉妹の真ん中の四番目で、父と兄二人と私と弟と姉の六人が炭礦で働きました。私の名前の由来は北海道の「道」と記念の「記」を取って命名したとのことです。一九三六年歌志内尋常高等小学校に入学。

後に、「炭鉱の語り部の世界」と称された、高橋揆一郎氏（本名良雄）が教師を勤めた学校。高橋氏は二歳の時に教師を退職して、私と同じ住友上歌志内礦に就職し、最初は坑内夫の給与計算係、後に社内報編集係。一九六五年、奥さん（小学校の教師）が札幌に転勤になったとき、上司（生涯の恩人としている）のはからいで住友札幌支店に転勤。一九七〇年四三歳で退職。文筆一本になり、一九七三年に四六歳で『ぼふらと軍神』で、第三七回文学界新人賞（文芸春秋社）受賞。一九七七年、『観音力疾走』で第一一回北海道新聞文学賞受賞。一九七八年、五〇歳で『伸予』で第七九回芥川賞受賞。一九九二（平成四）年に自伝的小説『友子』で新田次郎賞受賞。二〇〇七年二月死去、享年七八歳。

高橋作品には、人間の哀歓によせるやさしさがあります。

歌志内市名誉市民として、文学碑が建立されています。

一九三八（昭和二三）年、父の転勤（住友歌志内礦へ）で、神威尋常高等小学校（現在廃校）に転校。一年間だけ教師を勤め、後に、一九六四年『氷点』で、朝日新聞の二千万円懸賞小説に当選した、三浦（旧姓・堀田）綾子先生（一九二二（大正一一）年～一九九九（平成一一）年）がおられました。（私の住居の近くの炭礦の社宅を借りて、若い教師数人で自炊生活をしていた）当時は、一七歳のおてんば娘で、元氣ハツラツとした先生でしたが、二四歳から一三年間にわたる闘病生活で、人生観ががらりと変った感じです。闘病生活中に恋人が闘病生活中死去された影響で、クリスチャンの洗礼を受けています。神威尋常高等小学校教師時代のことを書いた『石ころのうた』という自伝的小説があり、自伝に『道ありき』三部作があります。三浦文学はキリスト教的作品が多く、北海道・旭川市に、三浦綾子記念文学館があります。

人生で強く影響を受けた、国民学校で高等科の二年間の担任の教師長谷太一郎先生については二〇歳前半の年齢で、視弱のため軍隊経験はありません。教科書を無視した授業が多く、生徒に関心を持たせることを重視した授業でした。歴史等は教科書の内容に関係のある佐藤紅緑（ハチロウ・愛子の父）、山中峯太郎、吉川英治等の小説を読んで聞かせてくれました。そこで小説の面白さを覚え現在の本好きにつながっているのです。好天気ときは、時々山に登り山の頂上で授業をしたり変わった教師でした。

当時、私は学校の教材は全部リュックサックに詰めており家では弁当箱以外は教材の出し入れをすることはなく、学校から帰ったら、夏は野球、冬はスキー。悪天候で外で遊べない時は、卓球と放課後は家に居ることはなく、遊びまわっていました。先生の生家が鮮魚や野菜の店で、

母がよく買い物をしており先生とは、私の事をよく話題になりました。勉強にも遊びぐらい熱中させる方法はないかとの母からの依頼で、授業中は必ず先生の質問の回答者に指名され答えられないと「もっとしっかり予習してこい」といわれていましたが、遊びに忙しく、予習する時間的余裕はないまま卒業しました。戦争末期は、勤労奉仕の時間が多く、高等科最後の夏休みは、留萌の造船所への勤労奉仕で終わり、学習意欲は沸かないままの卒業でしたが、長谷先生の授業は楽しかったです。この授業方法が、現在の私の性格に「役買っていることは確かです。

柔道の有段者でしたので悪さをした生徒を投げ飛ばしたり、往復ビンタを張ったり、現在では考えられない素行には厳しい先生でした。投げたときに怪我をしないように体育の時間に柔道の受け身を教えていました。

私は一九四四（昭和一九）年三月、神威国民学校（戦時体制で尋常高等小学校から国民学校に名称変更）を卒業と同時に、住友歌志内礦測量に就職しました。

§3 測量という仕事

当時一四歳で、私は大工になりたかったのですが、採用係が「父から測量に採用するように」と頼まれている縁で測量室に就職しました。小学生のころから算数（三角関数ができないと仕事ができない）が好きだったことが、測量屋として成功できた要因の一つだと思っています。当時は今と違って電卓等がなかった時代で、算盤の掛け算（五桁×七桁）ができないとつとまりません。徴兵検査前の若い人達ばかり（賃金が安い

ので結婚したら食べていけない。ある年齢に達したら、賃金の高い職種に変わっていく）の総勢一五人ぐらいの職場でした。同期は同級生男五人と女二人（女性は、初めての採用で図面のトレースが仕事）でしたが、五月に住友赤平礦に移り、九月に住友上歌志内礦に移動しました。最初は測量の手元で基本から学び、七年目から一つの現場をまかされるようになりました。炭礦の測量とは、坑内の採掘跡を測って図面を作成したり、掘進する方向や傾斜を現地で指示したり、地質調査をして露頭や断層を探し出して、石炭の埋蔵量の計算や毎月の掘進量を検測して、給与計算係に報告するのが主な仕事です。

一九四七（昭和二二）年の労働基準法の制定により、未成年者の入坑が禁止され坑外の勤務となりましたが、翌年より再び坑内にさがりました。

一九五三年を目処に赤平礦と上歌志内礦の合併が計画され、坑内の貫通と上歌志内から赤平への通勤通路（一、二〇〇メートル）の赤平側と上歌志内側と両方から掘削しての貫通測量があり、貫通点で誤差があつたら生産を中止して手直しをしなければならぬので（結果・誤差一二mm）、神経を使う難しい測量が多く、一九五四年に退職するまでの一〇年間で測量屋としての腕を磨きました。この間に、測量士の国家試験に合格出来たことは幸運でした。この資格が後のゼネコン（総合建設業）への就職を有利にしました。炭礦で生れ、父の後姿を見て育ち、坑内には自然に馴じんだ感じで恐ろしさを感じた事はありません。戦時中は生産奉国の名のもとに坑内の仕事を手伝いましたが、鈍感なのか辛いと思つたことはありません。戦時中は一ヶ月満勤して給料は一五円ぐらいで、当時は給料を受けても商店に品物がないのでお金の使い道はほとんどな

く、貯つたお金も戦後のインフレで価値がなくなりました。

戦時中は仕事が終わってから竹ヤリ等の訓練があり、一五歳の一九四五（昭和二〇）年春、徴兵検査前の若者に集合がかり、そこで全員に乙種海軍予科練習生の願書が配布され、この願書を提出するまで禁止され強制的に志願させられました。九月一日付で海軍航空予科練習生として土浦海軍航空隊に入隊の通知が来ていましたが、八月一五日の終戦で命拾いをしました。

§4 なぜ大手炭礦を辞めたのか

終戦時、私が勤めていた住友上歌志炭礦は、戦後炭礦では一番早く労働組合が結成され、当時はインフレが激しく賃上げ闘争が慣例行事化していました。はじめはストで減額になった賃金の支給を求めて、又ストを打つありさまでした。一九五二年、炭労の無期限スト（六二日間）で無収入になりましたが、当時は会社の寮に居たので食べるのには困りませんでした。食事代が借金として残り、この支払いで給料が減額になり、スト前より給料が減り生活が苦しくなったとき、佐賀県の江上鉱業㈱北波多炭礦に勤務していた父から、兄と姉は北海道で結婚して家庭をもっているから、独身であった私に「母が病弱なので、結婚前に、九州に来るよ」と、早くからいわれていましたので、退職の機会をねらっていた時、一九五四年、住友歌志内礦に勤務していた弟が、佐賀県の住友唐津鉱業所に転勤になったのを機に、一緒に九州に行くべく、何の未練もなく住友を退職して九州にきました。

その後の、在籍していた炭礦の労働組合の活動をみると、退職した

のは正解だったと思っています。

父は九州から転勤で北海道に渡ったときから、定年になったら九州に帰るのを「生きがい」として頑張ったとのことで、五五歳の定年「一九五〇年」と同時に九州に帰っていました。

§5 北波多炭礦時代（住友系）乙種炭坑

所在地、佐賀県東松浦郡北波多村大字岸山。「北波多村史」によれば一八七四（明治七）年ごろから一九三三（昭和八）年にかけて、好条件の厚層のみ採掘して放棄されていた鉱区を、いくつかの変遷を経て、一九三七年に住友石炭㈱が鉱業権を買収し「住友唐津鉱業所本坑と北波多炭礦の間に大きな断層があり、住友唐津鉱業所本坑から採掘不能のため、一九五九年八月、住友唐津鉱業所第二代所長で定年退職された、江上寛吾氏が租鉱権を設定して稼行した炭礦です。従業員は一〇〇人台で坑内係員も四人という小山です。

第一坑は、七ヘダ層・山丈（炭層の厚さ）七〇cm前後、炭丈（石炭の厚さ）六〇cm前後を採掘。北卸は、オノ目層・山丈三五cm前後、炭丈三二cm前後を採掘。この二坑口態勢で稼行。薄層だったので、坑道掘進は岩石掘進とあまり変わらなかったです。採炭方式は長壁式。ツルハシによるスカシ掘して、発破かけ落とし方式。運搬方法は七ヘダ層はU型コンベアーにチーン方式。オノ目層はスクレーパー方式。穿孔は、電気オーガーを使用。北卸の掘進夫として就職しましたが、最初は翌朝、手の指と腰が伸びなくて苦勞しました。若さですぐ慣れました。

金を稼ぐのは辛いのは、あたりまえという考えでしたので、採炭切羽

(採炭作業場) つくる時などは高さ1mもないところを這い廻って仕事(炭坑絵師山本作兵衛翁の絵のとおり)をしました。今、振りかえってみると、よく辛抱できたといながら感心しています。

採炭の経験はありません。オノ目層では、採炭夫は採炭切羽に入ったら、腹ばいになって仕事をしており、寝返ることもできない状態でした。半年ぐらいして、測量員が病気で欠員になり測量へ職種変更しました。

当時はテレビもなく、自宅から歩いて三〇分ぐらいの所に、住友唐津鉱業所の娯楽施設の映画館(家族館)が一軒あっただけで、他に娯楽施設は全くなく、暇つぶしに炭礦の保安規則の勉強をしました。力試しに保安技術職員の国家試験を受験したら合格し(この資格が後でゼネコンに就職の決め手)、最終的には一級土木管理技士を含めて七資格(学歴がないので積極的に国家試験を受験)を取得しました。

妻とは、母親同志が姉妹で従兄妹同志です。私の母は病弱で、床に伏せることが多く、その都度姉である妻の母が糸田町から出てきて看病していました。私の父は母姉妹とは幼なじみで、結婚話は父から出ましたが、結婚後、妻に聞いた話では「道記が他人と結婚したら、ヤチヨ(母)が可哀想だから、道記と一緒にヤチヨの面倒をみなさい」と口説かれて結婚に踏み切ったとのこと。当時は、妹が結婚前で母の面倒をみているうちに亡くなったので、結果として母の面倒をみることはなかったです。



新婦時代1957(昭和32)年秋
道記 27歳 弘美 22歳

母親姉妹は、福岡県築上郡新吉富村の生まれで、生家が残っていたので、妻が糸田町に戻って来てからは、妻が子供のころよく可愛がってくれた人がお元気だったので、二人でよく遊びに行きました。これが妻の楽しみの一つでした。

今までの半生を振り返ってみて、この時代が生活面で一番楽しかった時期。

番外編として炭鉱の請負給はどのようにして決められるのか記します。北波多炭鉱の場合、採炭は切羽の条件により一日の一人当りの平均賃金を決め、そして一人一日何函掘らせるかを決めて単価が決まります。

掘進も、切羽の条件により一日一人当りの平均賃金を決めて、一メートル掘るのに何人必要かによって単価が決まります。(支払う時は、先山と後山には、差が付きます)賃金は全員同じではなく、その人の技能や能力によって差がつきます。たとえば、採炭で二五日稼働した場合の賃金を二五、〇〇〇円と決めて、一人当りの出炭量を、二函半と設定した時、一函当の単価は四〇〇円となります。三函掘る人は二二〇〇円となり、二函しか掘れない人は八〇〇円にしかありません。

石炭を積んで坑外に出た函は、検炭係によって一函ごとに積載量の検収をして歩増、歩引をします。そのうちから何函かを抜き取り、ひっくり返してボタの混入量を調べて、検査をしなかった他の函も同率のボタ引きがされます。石炭の中に混じっていた、ボタは昇坑後にみられるように展示されてありました。

住友の炭礦に勤務していた時代に、同僚が坑内落盤災害で、父親を亡くしたおり、労災でありた補償金で八デな生活をして補償金がなくなっ

てから生活を縮小できなかったための惨めさとか。北波多炭礦時代は競艇の大穴で大金を当て、やみつぎとなり、田、畑、家屋敷を売り払い、金が尽きた時に自殺した人を見ています。さらに、戦後パチンコが入ってきたころは、パチンコに凝って破滅した人もいました。このように金の恐ろしさをみているので、金には用心深い性格になりました。

住友の炭礦に勤務していたころは、災害で身体障害者になった人を、会社の施設の管理人等を使用して面倒をみていました。

§6 新昭嘉炭礦時代（住友系）乙種炭坑

所在地、福岡県嘉穂郡碓井町（現嘉麻市）上臼井。一九三四（昭和九年）に田籠鋳業（株）によって開坑。一九五七年住友石炭（株）の資本がはいり、昭嘉炭鋳（株）となりました。

一九五九年四月に住友石炭鋳業（株）九州支店より北波多炭礦の経営者に話があり、住友が忠限の代り切羽として開発中の鉱区に、住友の第二会社である新昭嘉炭鋳（株）が租鉱権を設定し、稼働していた井ノ浦坑に測量の責任者として赴任しました。高温多湿で黙って居ても汗が吹き出す坑内で、当然の如く生産能力が悪かった。温度を下げるための通気坑道掘進の貫通測量と、休み明けに礦員が入坑前に坑内の全切羽（作業所）を巡廻して、ガス測定器を用いてメタンガスと炭酸ガスの合含率を測定して、結果を保安管理者に報告する仕事をしました。一九六〇年五月、坑内条件の悪化により、閉山しました。閉山後ただちに、北波多炭鋳に戻りましたので、私自身は閉山後の苦労はしませんでした。

この一年間で一番印象に残っているのは、鉱害補償交渉（交渉は鋳書

ボスに委託）で会社側と交渉が決裂したら会社の事務所前で被害者と名乗る人が、「ドクターストップ」がかかるまで「ハリスト」を打っていたことです。なぜ交渉が決裂したのか経緯はわかりません。

私の筑豊経験はこの一年だけです。

§7 再び北波多炭礦へ

北波多炭礦に戻って来てからは、一応測量の担当でしたが、資格を生かし坑内係員が休んだ日は火薬袋を担い、切羽で発破かけや火薬取扱所の管理や坑内保安など、小山でしかできない、さまざまな仕事を楽しみながらしました。（仕事としては、過去を振り返ってみて、一番楽しいかった時期）

周囲は採掘済みの古洞で水没していますので、岩盤のき裂を伝い坑内は雨降り状態で非常に水の多い炭礦で水との闘いでした。坑内の排水ポンプの電力費が同じ規模の炭礦に比較して高すぎると税務署から指摘されるくらい、坑内は水びたし状態で、第一坑本卸掘進延先（作業箇所）で水脈にぶち当たり、坑内切羽を水没させてしまい、ポンプを増設して排水に努めました。その時ポンプバックに流れ込む水にはゴミも一緒流れ込み、ポンプフードを詰まらせ揚水の効率を落とします。そこで坑口横にある脱衣所の風呂を沸かしておき、一人づつ順番にポンプバックに潜らせてフードに詰ったゴミを排除させ、浮き上がると同時に炭車に乗せて、引き揚げ、風呂に飛び込ませました。本人達も坑内が水没したら職を失うので真剣そのものでした。しかし、この努力もむなしく、水との闘いに敗れ、遂に閉山の止むなきに至り、従業員は全員解雇になり

ました。そして、炭礦の二二年間の歴史に幕をおろしました。時に、一九六二（昭和三七）年七月。時に、三三歳。

「『北波多村史』（五三頁）では昭和三七年七月長期にわたる降雨のため坑道浸水がはなはだしく、必死の復旧作業もかなわず、北波多炭礦が閉山と記述されていますが、事實は私の回想の通りです。」

実際は第一坑本卸の掘進延先で、発破をかけた時に、水脈（古洞ではありません）にぶち当たり、水が勢いよく吹き出したのです。私は自分の目で確認しています。

北波多炭礦は水脈にさえぶち当たらなかつたら、後何年か採掘ができた当時としては信じられない収益が非常に良い（黒字）炭礦でしたので、残念でした。

従業員は地元の人が多く、炭礦住宅等の福利厚生施設にまつたく費用がかからなかつたのも、利益が出た要因の一つです。

閉山後一五人程再雇用して、水没を免れた坑口付近の炭柱を採炭しながら、当時の事業団に買上交付金の申請業務を一人で担当しました。一九六四年三月に交付金の支給を受けて退職し、炭礦との縁が切れました。一人で業務をやり遂げ、この自信がその後の仕事をやり遂げる上での自信につながったことは、最大の財産となりました。その後、スクラップ予定の（現在、操業はしているが近い将来閉山した方がよい炭礦）大手炭礦（住友）より将来については責任を持つから、いつかは来る閉山のために、来て欲しいとの誘いがありました。炭礦で生れ炭礦で育った者として炭礦に対する未練と将来に対する不安は多々ありましたが、炭礦の将来性を考えた時、年齢的に今、炭礦から足を洗って、転職した方が賢明と判断し、炭礦と縁を切りました。時に、三四歳でした。

話が前後します。坑内に下がった時は落盤を恐れ細心の注意を払い、「ヤマ（地山）は生き物、昨日と今日は違う油断するな」の言葉があり、地山の変化の恐ろしさは経験した者でないと解りません。坑内作業はほとんどが、請負給で、金にならない仕事は嫌がり手抜きをしがちで、柱を一本打てば助かったのに、その一本を手抜きしたために大怪我をした人もみました。

坑内の死亡災害や大きなケガはガス爆発を除き、七〇%以上が落盤災害です。

炭礦退職後いろいろな仕事を経験しましたが、炭礦みたいに働き易かつた処はありませんでした。坑内は、年中同じ温度で、着る物にもこだわらず、天候には関係なく、私は炭礦で一度も怪我をした経験はなく、安全にさえ注意して働けば天国でした。人からみれば、三K現場（きつ、きたない、危険）で辛い仕事でしょうが、今振り返ってみて、やりがいがあったと満足しています。

妻の両親は、糸田町の明治豊国炭礦に、四〇年以上勤務。一九〇七（明治四〇）年の豊国のガス爆発を経験（当時一八歳）しています。両親の話では、坑内でいつ事故で命を落とすかわからないので、給料を受けたら「宵越しの銭は使はぬ」とばかりに派手な飲み食い、ほとんど使ってしまった、普段はピーピーしていたとことです。そのために女房達は生活のやり繰りに苦労が絶えなかつたとのことでした。

妻は両親から炭礦の話の聞いたりみながら育っていますので、結婚した当初は大きな弁当でとても一食では食べられない量が入っていて、多すぎと文句をいったら「坑内にさがつたら、いつカンズメ（出口が落盤

等でふさがって出られなくなる(こと)なるかわからないのだから、一度に食べないで、残しておきなさい」と、いわれました。「いついつ点では、私より妻の方がしつかりした考えをもっていました。

北波多炭礦での最大の仕事は、租鉱権の鉱区を買収して鉱業権を設定することでした。監督官庁(当時の福岡通産局)に対して、この鉱区の買収がいかに価値があり将来性に富んでいるかを説明しなければなりません。作成した書類の説明会では、向かい側には通産局側から担当部長以下担当者が出席、私の背後には住友九州支店のトップ以下関係者、炭礦の役員等が並びました。作成した書類(私が作成)で説明し、質疑応答があり、この説明会で私の仕事ぶりは盤石の信頼を得ました(これが北波多炭礦閉山後、住友より声がかかった最大の理由)。

監督官庁への説明会終了後、住友九州支店技術部門のトップから、父に「説明会での、説明、質問にたいする答弁、まったく矛盾がなく、無事終了したのは息子さんの力量によるものと、すごい息子さんをもっていますね」と、お褒めの言葉をいただいたとのことで、父「江上鉱業(株)取締役・北波多炭礦所長 石炭鉱山保安規則による保安管理者」はハラハラしながら聞いていたので、終わってホットしていたときだけに、非常に嬉しかったとのことでした。

事業団は炭礦の何を買い上げるのか

申請炭礦の理論可採埋蔵炭量を買上げる 炭礦はこの炭量の証明をしなければならない。

炭量は日本工業規格(JIS)で確定炭量・予想炭量・推定炭量別に

計算。

事業団が要求した書類を期限までに提出する義務がある。

事業団の現地調査が終わったら、申請坑口を埋没して確認を受けないと交付金は支払れない。

未払い賃金あつた場合は、交付金より優先して支払われる。

閉山時、六ヶ月以上の勤務者には、平均賃金の一月分分の解雇手当が支払れる。

炭礦の閉山を公示して、鉱害の申し立てを受け付け、鉱害が認定された場合は、この鉱害を解決することが、交付金を受けるための条件。

買い上げた炭礦の所有権は事業団に移る。

事業団の職員は炭礦からの出向者が多かった。

九州支部の調査員 大手炭礦の課長クラス。

東京本部の調査員 大手炭礦の部長クラス

現地での理論可採埋蔵炭量の確認が最大の業務。

申請炭礦は、この現地調査に全精力を投入

時々説明会があり、ほかの炭礦の出席者は年配のお偉ら方達で、若造は私一人で、事業団の担当者もビックリしていました。事業団から会社に、こんな若い人で大丈夫かの問い合わせがあつたのですが、鉱業権を設定のさいの、実績がありましたので、「会社は信頼してまかせているだから、心配には及ばない」と返事をしたとのことでした。終わってから聞いた話です。

北波多炭礦の経営者は、炭礦の利益で福岡市中央区にある旧日本生命

株九州支社（現福岡市赤煉瓦文化館 国指定文化財）の隣に地下一階地上四階建のビルを建て、（このビルを施工した会社に、炭礦退職後就職）さらに二日市温泉塔原に、今でいうモーター式の山荘（現在は解体して姿はない）を建て（ビル共々、無借金）たことは、炭礦でいかに利益（儲）をあげたかを証明しています。山荘名は石狩山荘でしたが、部屋名は全部北海道の地名からつけ、飲み物等も北海道産を使用し、料理名も北海道ゆかり名をつけました。仲井さんも二〇代の若い人だけを採用していましたので、当時は一カ月先ぐらゐまで予約で満杯と繁盛しました。毎日のように大人袋が出ました。

この山荘には、大相撲九州場所の期間中は、閑取が宿泊していました。事業団の申請業務が終わり、答えが出るまでの間は、よく山荘で暇つぶしをしました。

『金田町史』（五〇一頁）によれば、芳ノ谷炭坑（北波多炭礦はこの残炭を稼行）は吉田茂「戦後の首相」の父親竹内綱が明治一八年頃開坑した所である、とあります。

芳ノ谷炭坑はボタ山はなく、ボタは谷間に捨てられていました。私の住居はこの上に建っていたので、当時はまた洗炭技術が未熟で、ボタに石炭の含有率が高く、家のまわりを掘ると石炭が豊富に混っついていて、燃料に不自由することはありませんでした。北波多炭礦閉山後、長崎県の末岡鉱業株がこの谷間に捨てられたボタで水洗炭業を興しました。

妻の伯父は、芳ノ谷炭坑で働いた後、経営者の一人高取伊好氏が経営する大町町の杵島炭礦に移り、そこで亡くなっています。（妻の父親の話 戸籍謄本で確認）

高取伊好氏（一八五〇～一九二七、佐賀県多久市の公園に胸像がある）は佐賀県唐津市に豪邸（国の重要文化財に指定されている）を建てましたが、炭礦経営中は北波多村大字岸山（今は唐津市）に住んでいたのです。

現在もつとも力を入れているのは、筑豊の「炭礦殉職者の慰霊碑」廻りです。そして筑豊に住んでいることに誇りをもちたいと思っています。

§ 8 北海道時代の炭礦の暮らしの思い出

炭礦は職員と礦員との身分差が激しい職場です。炭礦住宅は隣り近所同士が自然に助け合う生活でした。オ八ギや赤飯やすしなどをつくるときは、自分の家で食べる何倍もの量をつくり、隣近所に配って歩きました。よその家からのもらい物も多く、その時のお返しは、マッチ小箱一箱とか八ガキ一枚がしきたりで、母は何時もマッチと八ガキを切らさないように気を使っていたようです。春はニシンが貨車で入り、一度に三〇匹以上購入してそのまま焼いて食べ、残りは乾燥させて身欠ニシンとして保存していました。最終的には一〇〇匹以上購入していました。秋は漬物用の大根や白菜を洗って干して一冬の漬物を漬けるのが、女性の大仕事でした。冬になり、雪が降り出すと、近所の奥さん連中が各自、自慢の漬物を持ち寄ってストープを囲み、お茶を飲みながら井戸端会議に熱中していました。そのストープの上は洗濯物が一杯干されていました（冬は外に洗濯物は干せない）。

ニシンが入らなくなった頃よりホルモンが貨車で入り、皆バケツをもって買いに行っていました。スコップでバケツに入れており、今では衛生

上とても考えられません。

小学校に入る前の五、六歳のころは、父が三番方で坑内から出坑して、風呂に来る前の朝の七、八時頃に、一番方の時は夕方に、父の着替えを風呂敷に包み背おわされて風呂場で父の来るのを待つのが日課でした。風呂場には近所の悪たれ坊主達が、それぞれの親の着替えを背おって集まり、走り廻ったり風呂に潜ったりして遊ぶのが楽しみの一つでした。この時一生の持病と成った中耳炎に冒されたのです。

小学生の頃（戦時中）は、安全週間（七月一日～七日）中は炭礦の坑口で入坑する人達に「御安全に」と挨拶にでることを義務付けられていました。主婦達は出坑者に煙草や湯茶の接待をしていました。

戦時中は、冬に雪が降り出すと東北地方から商店や農家の人々が産業報国戦士という名のもとに、坑内労働者として三ヶ月交替くらいで徴用されてきていました。年齢的にも若い人は軍隊に行っていたので、中年の人が多く農家の人はある程度肉体労働に慣れていたでしょうが、商店の人は辛かったと思います。

炭礦住宅に従業員が引越して来たら、黙っていても隣近所から大勢の人が加勢に集まってきた。アットという間に終わりました。炭礦住宅では尽くしたことに代償を求めることはなく人情に厚い社会でした。

筑豊の人々も川筋気質で情の厚いところがあると言われてきましたが、最近はこの風潮も薄らえてきたように感じるのは私だけでしょうか。

昔の筑豊では近所同士が助け合って生活する事を「もやい分け」と言っていたようですが、現在もこの言葉は残っていますか？

毎年五月、寒さや和らぎ暖かくなりかけた時期に櫻も満開のもとで、炭礦あげての炭山祭り（炭礦の山神社の祭り 祭神は大山祇神）があり、

この三日間は各炭礦単位で催され祭り一色となり、いろいろな興行が催され一年で一番賑いました。さらに秋には歌志内の成田山の祭りがあり、これは駅中心の市街地で盛大に催され、この日は他所からも大勢の人が集まり炭山祭り以上の人出でした。この二つの祭りは私が物心ついた時には既に始まっていました。この二つの祭りのときだけ、普段もらえない小遣い（当時のお金で五銭）がもらえて、露店で自分の買いたい物が買えたのが嬉しかったです。お盆は一〇メートルくらいの櫓の上で太鼓が鳴り、櫓を中心に民衆が二重三重と輪になって一晩中踊りまくっていました。この祭りや盆踊りは、戦時中も途絶えることはありませんでした。

大相撲の横綱玉錦が亡くなる前年の、一九三八（昭和一三）年頃だと思いますが、巡業にきたときに父に連れられて見物に行つて、初めてお相撲さんを見て、その大きさに驚いた記憶が残っています。

戦後、兄二人が外地から復員してきたときは、物資不足の時代で、一九四六年一二月の政府の「傾斜生産政策（石炭・鉄鋼の生産を最優先）」で炭礦の従業員には優先的に物資の特配が有り、父は「家賃、電気、水道、燃料等生活必需品がすべてタダで、こんな生活のし易い所はない」と言つて、兄二人を父や私が勤務していた住友上歌志内礦に入れました。

戦後この「傾斜生産政策」の最盛期には、この恩恵を求めて、地方からかなりの人が流れこみ、この人達は世情が安定しはじめた一九五〇年代に入ってからかなり人が去っていききました。

この「傾斜生産政策」が実施されていた頃は住友上歌志内鉱に居り、倉本聡著『昨日、悲別で』（理論社、一九八四年）に出てくる「悲別口マン座」（当時は親友会館）に、よく劇団や楽団（田端義夫等一流の歌

手が来ていました)が慰問興行にきていました(入場料は無料)。その合間をぬって炭礦の素人楽団等で結構娯楽を満してくれました。その素人楽団の一つに同級生が結成した楽団があり、彼は生徒時代は授業についていけず、授業時間中は先生が組の雑用をさせていました。人は何処に才能があるか解らない例の一つとして貴重な経験を学びました。

住友歌志内礦時代、家の向隣に当時ボクシング界で、ピストン堀口と人気を二分していたヤリの笹崎の実兄(後の住友奔鉱業所の副所長)が住んでおり、時々帰省して来てトレーニングをしていました。

俳優では美男子・上原謙(子息が加山雄三)、好男子・佐野周二(子息が関口宏)とともに快男子といわれていた佐分利信が俳優になる前は新歌志内分教場の代用教員をしていたとのことです。実姉が住友上歌志内鉱の職員(土建係)に嫁いでいたので、時々実姉を訪ねてきていました。

子供のころは、夏より冬が楽しみで、根雪になると上級生に連れられて三時間ぐらいかけて、山(現かもい岳国際スキー場)に登り、山頂で飯を炊いて食べ、夕方薄暗くなるまで遊び廻り、帰りは一〇〜一五分ぐいの弾丸滑降で帰ってきたり、夜遅く坂道に水を撒ておくと、朝はアイスバーンになっており、そこをソリで滑るとかなりのスピードが出ます。大人達が出勤の時間になると滑って歩けないので、ストーブの灰を撒かれるので、そこまでの勝負です。今の親達だと「危ない」といって止められるような遊びを、恐ろしさを知らずに無鉄砲にしました。寒さに負けて、泣いて帰って母からは「泣いて帰るのならば明日から行かないように」「叱られても翌日になると、また出掛けるありさまで、母も心得たもので、

帰る時刻になるとお湯を沸かしておいてくれました。親の有難いところです。このことを、母は妻によく話して聞かせていたとのことでした。

§9 北海道生まれの私がなぜ筑豊にいたのか

北海道から九州にきたいきさつについては前に述べました。

北波多炭礦の買上交付金を受給して辞める直前に、北波多の経営者にゼネコン(総合建設業、田川市立病院を施工した会社)から二〇〇二(平成一四)年日韓共催サッカーワールドカップでカメルーンの合宿地として一躍有名になった、大分県中津江村(現日田市)の鯛生金山(現在は地底博物館・鯛生金山「近代化産業遺産」として経済産業省の認定を受けた体験型の観光施設)の掘削工事を請負つたので「技術職員を紹介して欲しいとの依頼があったので、行く意志があるのなら紹介する」との話があり、当時、私は学歴がないので、測量の技術を生かして地元の小きな建設会社をねらっていました。会社の規模や業績を調べたところ優秀な会社でしたので、適職と判断して就職しました。途中で聴力の失聴等の危機がありました。会社が最後まで面倒をみてくれ五七歳の定年後三年間の定年延長があり、途中で退職することもなく勤務しました。就職した会社は請負業で仕事を受注した現場を転々と歩かねばなりません。就職当時は子供が幼稚園入園前と幼く連れて歩くわけにはいきませので、糸田町の妻の実家の隣に家を見て妻子を残して、単身赴任をして、妻子には寂しい思いをさせました。結果として定年まで五〇の現場を勤めました。近所の人は子供を連れて離婚して帰ってきたと思っていたようで、たまに帰宅すると近所の人の子供に「どこのおじさんが来

ているの」と聞かれていたとのことだ。

亡くなった妻からはよく「古里の北海道は懐かしいでしょうから一度行ってきたら」とよくいわれていました。その都度、室生犀星の詩

ふるさととは遠きにおいて思ふもの

そして悲しくつたうもの

よしや

うらぶれて異土の乞食かたいとなるとても

帰るところにあるまじや。

を読んで聞かせていました。

現在、歌志内市の炭礦跡地は文化遺産として残した物を除き住宅等はすべて取り壊され藪林となり、昔の面影は何も残っていないとのことだ。

北波多炭礦跡のポタ山も均されて工場団地として整地されて面影は残っていませんが、懐かしくて、妻の生存中は二人でよく行きました。

北海道歌志内市（日本一のミニ市）と九州一のミニ市の山田市（現嘉麻市）は姉妹都市関係を結び、毎年交替で学生・生徒が三泊四日の交流がもたれています。

ここから、話が、がらりと変わります

§ 10 私の突発性難聴と妻弘美の死

最近「セカンド・オピニオン」という言葉をよく聞かれると思います。意味は病気になるたとき、最初の医師の診断に疑問を持ったら、二人

目の医師の診断を受けなさい」ということです。私は子供の時から耳鳴り（現代の医学では治せない）で聴力が少し落ちました。補聴器なしで電話には不自由はしませんでした。だんだん聴力が落ち始めたときの一九八一（昭和五六）年、広島県の中国自動車道建設工事の現場に赴任しました。標高七五〇メートル超で気圧の低い処での生活でした。休暇で帰宅して正常な気圧の中で、ある日突然相手の言葉が聞き取れなくなり、そこで正常な気圧の現場に変わり、宇部市で耳鼻咽喉科の医師の診断を受けたら「二ヶ月ぐらい治療をしないと駄目だ」といわれました。治療しても何の効果も現れないので、福岡市の医師に変えましたところ、

「この病気は発病して一週間が勝負でもう手遅れで自分の手には負えないから、大病院を紹介しましょう」といわれ、福岡大病院の耳鼻咽喉科宛の紹介状を書いてくれました。直ちに福岡大病院に入院して検査を受けましたら「もう手遅れだと思うがやるだけの事はやってみよう」といわれ注射を打ちましたが「普通は七本で視力が落ちる副作用があるが、まだ大丈夫のようだから、一〇本まで打ってみましょう」ということで一〇本まで打ちましたが、医師は「これ以上は恐ろしくて打てない」ということで、治療をやめました。結果として、聴力は回復しませんでした。耳の中は耳鳴りで、いつも蒸気機関車が走っているのです。病気になるた時、医師を選ぶことが、いかに大切かの例です。

私の場合もそうですが、亡くなった妻も医師からは「入院するような病気ではない、家から通院しなさい」といわれましたが、本人は「腰が痛くて歩けない」というので仕方なく入院させてくれました。そして「リハビリで歩けるようにして、帰してあげます」といわれていたのに、

入院七四日目に亡くなりました。危篤状態になったら病院から家族に「知らせる処には連絡を取った方がよいですよ」（家族は、亡くなる四時間前まで病院に居た）といわれるのが普通ですが、このようなことはまったくなく明け方に病院から「亡くなられました」と突然連絡が入りました。一人で寂しく死なせたことを、今でも「可哀想であり、不敏でなりません」「無念でした」「寂しく死なせた」ことを仏壇に詫る毎日です。それ以後は医療関係の書籍の購入と新聞切り抜きを始めました。新しい分野ですので書籍も豊富です。

現在は健康でも将来、病気は避けて通れません。最近ではテレビでも健康番組が増えていますが、うのみしたら危険です。良い面のみ強調し、副作用についてはあまり説明しません。私の最近の体験で放送をうのみして食べて、血液検査を受けたら「尿酸値」が異常に上がっており、医師から「このままいたら痛風になりますよ」とおどかされた経験があります。管理栄養師に確かめたら「一番尿酸値が上がる」食べ物でした。管理栄養師の指導を受けて食べる物を変えたら、すぐに下がりました。医師に言わせると「自覚症状が無いのが一番危ない」とのことです。

最近、「PPK」運動がはやっています。「PPK」とは「ピンピンコロリ」をローマ字書きした頭文字で、「元気にピンピン生きて死ぬ時はコロリと」つまり、長患いをせず、寿命と健康寿命の差を縮めていくことという意味です。昨年の日本人の平均寿命は男性七九・〇歳、女性八五・八歳、ですが健康寿命と約七〜八歳の差があります。「その気があれば、健康寿命も延ばせるはず」です。「健康」は誰もつくってくれませんが、自分でつくるものです。平均七〜八年も介護が必要では、本人も難儀でしょうが、家族や回りの者はそれ以上に大変です。

人生に「健康で生る命」ほど大切な宝はありません。今後ボケ防止を兼ねて、資料収集に励みます。

§11 ゼネコン（総合建設業）退職後の私

北波多炭礦退職時、私は「土地家屋調査士」の資格を持っていたので、炭礦の福岡営業所の田中成年所長（後の天神芙蓉創業者）より「資格を生かして、小さくても一国一城の主になれ」と独立して事務所を開業することを強く進められました。営業に自信がなくゼネコンに就職しました。

田中所長は江上鉱業（株）退職後、福岡市天神で飲食店（天神芙蓉）を創業し、おりからの高度成長期の真つただ中で店の前のビル建設工事が始まったとき、建設会社から従業員（の夜食を一括依頼を受けたのを機に、二四時間営業に切り替えたとこる爆発的な成功を収めました。そのお金で、福岡空港と博多駅をつないでいる道路現在の空港通りがなかったときに、将来は道路ができることを見通して、土地を購入して置きました。人は当時田んぼであった土地を買って何をやる気だろうと噂していたとのことです（創業者の話 情報戦争に勝った例）。空港通り道路工事が始まったのを機に、この土地に国際観光レストラン（芙蓉別館）を建てました。時々遊びに行っていたので、創業者から「定年（当時五七才）になったら、わしのところへ来い」といわれていました。ゼネコンでは、全社的品質管理（TQC、今のTQM）室の仕事の補助をしていたので定年が延長になっていました。六〇歳の時「君は定年になったら、わしのところに来るのではなかったのか、うちの定年は六〇歳」と言わ

れたのを機に年齢超過でしたが、一九九〇（平成二）年にゼネコンを辞めて芙蓉に転職しました。宿舎は、会社がワンルーム・マンションを用意してくれ、食事は商売道具で困るはずはなく優遇してくれました。創業者からは「一年間は何もなくても良いから店の経営の仕方をシッカリ学んでくれ、ほかの仕事に手を出すと回りが見えなくなる」といわれていましたが、外の幹部の手前や遊んで給料をもらつのも心苦しいので、昼食時に駐車場で車の誘導や、洗い場のおばさんが休んだときには洗いの加勢等いろいろな仕事を経験しました。面白かったです。そして、味の勉強だということで、創業者と他の店を食べ歩きを楽しみました。

創業者は超がつくワンマンで話すことは炭礦時代の思いで話しばかりで、炭礦時代を懐かしかったです。『炭礦の話』を聞いてくれるのは、あんたしかいないのだから、わしの生きている間は辞めることはならんよ』といわれていました。

一九九五（平成七）年創業者が亡くなり、四九日忌をすませたのを機に六六歳になっていたので「職場から墓場に直結した人生ではわびしい」と思って、定年超過を理由に辞めさせてもらい、筑豊に帰り、本格的に資料収集を始めました。

このレストランに勤めていた時、中国の大学から九州大学に採放学と環境学の研究に来ていた講師がアルバイトで働いており、この講師から炭礦の技術的な質問に答えて喜ばれました。

創業者の長男は、九州大学大学院修了後、芙蓉の社長。

むすび

朝日新聞一九五八（昭和三三）年三月に連載された『石炭』で「筑豊はあと四〇年」とありましたが、わづか一八年後の一九七五年八月に貝島炭礦が閉山して筑豊から炭礦が完全に姿を消してから三〇年以上歳月が過ぎました。

日本の市場から石炭が消えたのではなく、日本の最高出炭量時代より多い輸入炭が入ってきているのです。日本の石炭は石油にも負けました。輸入炭の単価にも敗れたことになりました。

自分の半生を振り返ってまとめてみるのも無意味ではないと判断して、この回想録を書いてみたのです。

亡くなった妻からは「あなたの話は短絡が多くて聞き慣れている私でも、エツ」と思うことがあるのですよ、相手に解るように話なさい」とよく注意されていました。内容に短絡があると思います。皆さん方の指摘を受けたいと思っています。

私は精神安定剤として、藤沢周平氏の小説を読みます。藤沢作品には最後に心を和ませてくれる言葉がはいっています。

最後にサムエル・ウルマン著の『青春』の詩を掲げます。

私は肉体的には年相応の衰えを感じますが、しかし思考はまだ「青春」で未知への探求心は旺盛です。自分を老人と思ったことはありません。

サムエル・ウルマン（一八四〇～一九二四）

八〇歳の誕生を祝って家族が出版。 作山宗久「訳

青春とは人生のある期間ではなく、

心のもち方を言う

バラの面差し、紅の唇、しなやかな手足でなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは臆病さを退ける勇氣、安きにつく気持を振り捨てて冒険心を意味する。

ときには、二〇歳の青年よりも六〇歳の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、熱情は失えば心はしぼむ。苦悩・恐怖・失望により気力は地を這い精神は芥にある。

六〇歳であろうと一六歳であろうと人の胸には、驚異に魅れたる心、おさな児のような未知への探究心、人生への興味の歓喜がある。

君にも吾にも見えざる駆遣が心にある。人から神から美・希望・喜び・勇氣・力の靈感を受ける限り君は若い。

靈感が絶え、精神が皮膚の雪におおわれ、悲嘆の氷にとざされるとき、

二〇歳であろうと人は老いる。

頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、八〇歳であろうと人は青春にして己む。

訳者はある結婚式の祝辞でこの詩を知り、六年の歳月をかけて、徹底的に研究に打ち込んだのです。

最後の最後に現在の「平和日本」のために命を捧げた御霊を忘れてはいけないと思います。

【参考文献】

- 深町純亮『炭坑節物語』（海鳥社、一九七七年）
- 『東定宣昌教授からの書簡』（山上道記宛、七月一日付）
- 熊三『石炭資料展をみて』（嘉穂地方誌第二号、一九七三年）
- 通産省鉱山保安局『石炭鉱山保安規則』（白亜書房、一九六五年）
- 高橋揆一郎『帽灯に曳れて』（潮出版、一九八四年）
- 三浦綾子『道ありき・三部作』（新潮文庫、一九八〇年・八二年）
- 山本作兵衛『筑豊炭坑絵巻』（葦書房、一九七三年）
- 室尾犀星『愛の詩集』（角川文庫、一九九九年）
- 『糸田町史』（糸田町、一九八九年）
- 『北波多村史』（北波多村、非売品、一九六三年）
- 『碓井町史』（碓井町、一九八二年）
- 『金田町誌』（金田町、一九九九年）
- 西日本新聞「東京発かわすじーブル」（二〇〇三年一月二五日付）
- 夕刊読売新聞「NYに響け筑豊の魂」（二〇〇二年四月三日付）
- 読売新聞「日本人の平均寿命」（二〇〇七年七月二七日付）
- 読売新聞「句を訪ねて、鯛生金山」（二〇〇七年二月二五日付）

朝日新聞「石炭」（一九五八年三月に連載）

サムエル・ウルマン著 作山宗久訳『青春とは、心の若さである』（角川文庫、一九九七年）

追記

九州の石炭の歴史を調べるのには、経済産業省九州経済産業局発行の『九州石炭鉱業の歩み』が参考になります。

敬称は略したところがあります。

幼稚な、私の文章に、根気よくご指導を下さいました、三輪宗弘九州大学教授には、厚くお礼申し上げます。有難うございました。

最後になりましたが、この一文を今は亡き妻弘美に奉ぎたいと思います。